

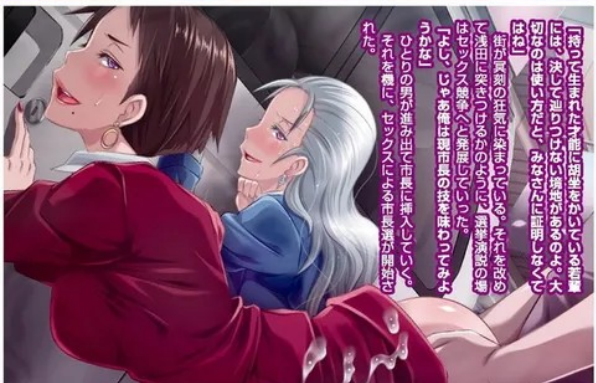
受胎する淫魔の萌兆

真刻園

著 雑賀匡
画 フツチャーじ
原作 水谷



浅田は抱き合うようなかたちになっているふたりに近寄ると、秘部が重なり合っている部分にペニスを突き入れていった。
「んうっ……!!」
「あっ、はぁあああ……ッ!!」
同時に上がる艶めかしい嬌声。



「あ、浅田さん、お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「はい、元気です。お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「あ、浅田さん、お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「はい、元気です。お久しぶりです。最近、お元気ですか？」



「あ、浅田さん、お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「はい、元気です。お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「あ、浅田さん、お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「はい、元気です。お久しぶりです。最近、お元気ですか？」



「あ、浅田さん、お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「はい、元気です。お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「あ、浅田さん、お久しぶりです。最近、お元気ですか？」
「はい、元気です。お久しぶりです。最近、お元気ですか？」



狭間 エリ

二条 静恵

浅田 真

伊集院 真矢

静恵の補佐をしている淑女。神宮学園の教頭とシスター長も兼任している。礼儀正しい人格者でありながら、ユーモアに理解を示す寛容さで、学園生からの信頼は厚い。静恵ほどではないものの、簡単な魔法を使用できる。

神宮学園の学園長。浅田の高校時代に彼の担任をしていた。仕事の早い「できる女」で、自身が考えていることや行動の意図を語りたがらない。学園を襲う怪異現象の対抗手段として、様々な魔術を使うことができる。

教員免許を取得したばかりの新任教師。勤め先が見つからず貧困に陥っていたが、恩師である静恵の斡旋で神宮学園に配属された。節操のある真人間であり、女性関係に限ってはとりわけ慎重になってしまう。

神宮学園の生徒。素直で誰からも好かれる性格だが、やや天然気味。家庭を顧みない両親の代わりに浅田が彼女の面倒を見ていた過去があり、彼を実兄のように慕っている。



受胎する淫魔の前兆
真刻学園

著 維賀匡
画 プッチャーU
原作 ルネ

けれど、これは明らかに異常だった。

「先生は私の担任ですな。だから、苦しんでいる生徒を救ってください。」

「え、君がなにを苦しんでいるというんだ？」

「もちろん、性欲が満たされなくて……ですよ。セックスがしたくてしたくて、こんなに苦しんでいるのに……」

「うっ!? ちょっと、そこは……」

彼女の細い指が、ズボンの上から男性器をまさぐってくる。慌てて腰を引こうとしたが、いつの間にか彼女のふたりが左右から浅田の身体を押しさえていた。

いくら非力な少女とはいえ、二人が相手だと抵抗するのもしばしい。

彼女たちは相変わらずセックスと笑いながら、浅田の尻や胸へと手を伸ばし、艶めかしい手付きで全身を撫で上げてくる。

「や、やめないか。こんなこと……」

身体に触れてくる女生徒たちの柔らかなさかさと、鼻を刺す甘い匂い。

こんな異様な状況にあるにもかかわらず、浅田の胸は性的な興奮によって高鳴り、自然と体温が上昇していった。

「私だけじゃありませんよ。だって、この学園にいる男の人は先生じゃないんですから。」

セックスの相手をして欲しいと思うのは当然じゃないですか」

普段のように、礼儀正しく、的確に要点だけを話す委員長

甘い吐息を吹きかけられて思わず顔を背けたが、顎を押しえられ、正面からジツと顔を覗き込まれてしまう。

「浅田先生は、私の気持ちを無視するつもりなんですか？」

「ち、違う……ただ、君の言っていることは……」

股間に触れていた西園寺の手が、ズボンの上からギューとモノを握りしめてきた。

思わず俯けない声を上げてしまったのは、いつの間にか勃起してしまっていたペニスに刺激を受け、甘美な感覚が下半身を走り抜けたからだ。

まるで胸が湧騰しそうなほどの興奮だった。

「ほら、先生のオナチンも、私たちの中に入りたいって言ってますよ？」

「は、放してくれ……」

「そんなの嫌ですよ、せっかく処女喪失のチャンスなのに」

「そうそう、先生にはたっぷりと精液を出してもらわないと」

「はあ、これが男の人の匂いなんですね」

浅田がどれほど悪態しても、二人の女生徒は身体に張りついたまま離れようとしな

「ば、馬鹿……考え直せ！」

教え子たちに密着され、股間をまさぐられて勃起している

この状況を消げなく思いながらも、浅田は崩れそうになる理性を必死に維持し、自分の中に燃り始めている悪欲を抑え込み続けた。

「このままじゃマズイ！」

生徒のほうから積極的に迫ってきたので肉関係を持つてしまった——などという言いわけは絶対に通用しないだろう。

早くなんとかしなければ、取り返しのつかない事態になる。

「うふふ……先生のこ、ガチガチに勃起しているじゃないですか、これって、私のことを一人前の女だと認めてくださった証拠ですよ！」

焦る浅田を余所に、西園寺は股間を撫でながら嬉しそうに呟いた。

「ち、違う、いい加減に放してくれ！」

「本当に拒絶するつもりなら、逃げ出せばいいじゃないですか」

「だが、君たちの力が強くて……」

「そうですか？ 本当は逃げられるのに、わざと捕まってるんじゃないですか？」

「そ、そんなことは……」

「よく考えてください、浅田先生」

西園寺は妖艶な笑みを浮かべたまま、背伸びをして浅田の耳元で囁きかけくる。

「ほら、私とセックスすることを……北大路さんや、龍ヶ崎さんにオナチンを挿れて、射精することをイメージしてみてください。」

「それは……」

「どうも気持ちよそそうとは思いませんか？ 楽しく……痛しくはないですか？」

西園寺が突き出す言葉が、浅田の精神を徐々に壊していく。

股間の肉棒はさらに勃起し、三人の女生徒が潮ら汗臭い吐息に頭が朦朧としてきた。

「こ、これはどうしようもないこと……なんだ。」

彼女たちから逃れるには、力尽きて払いのけるしかないだろう。

だが、教師である自分が女生徒たちに暴力を振るうわけにはいかない。場合によっては、肉関係を終んだ以上の問題に発展する恐れがある。

頭の中でそんな言いわけをしながら、木当は浅田自身も負けていた。

西園寺が指摘したように、自分もこの先のことを期待している。心の奥底にある情欲が、彼女たちと同調してしまっているのだ。

理性では駄目だと分かっているのに、身体が動かなくなってしまう。

「さあ……そうそう、先生のオナチンを見せてもらいますね？」

びつたりと密着していた西園寺は、身体を消らせるようにして浅田の前にしゃがみ込む

14 と、ズボンのベルトを外して引き抜いた。その様子を、北大路と龍ヶ崎が食い入るように見つめている。

「だ、駄目だ……やめろ！」
腰を引こうとした浅田を制し、西園寺は期待に満ちた表情を浮かべながら「フスナ」を引き下ろし、「ゆっくりとペニスを取り出して、いった。」



第二章 神宮学園

15 第一節 神宮学園
私立神宮学園。日本でも屈指の名門女子校であるこの学園は、政界や経済界に大きな影響を持ったちの子女が集まるお嬢様学校でもある。ミッション系の学園であることから、欧米にある学園との交流も盛んだ。大学の教育課程を卒業して教員免許を取得するも、どこにも動機先を見つけないことができなかった浅田真が、そんな名門校で教師として働くことができたのは、ひとえに恩師である三条静恵のおかげだった。神宮学園の学園長を務めている彼女は、塾講師として門口を渡っていた浅田を教壇に昇進してくれたのである。
「お久しぶりね、浅田くん」
学園長室で顔を合わせた静恵は、訪れた浅田をにこやかな笑顔で迎えた。電話やメールでやりとりはしていたが、顔を合わせるのは実に三年ぶりのことだ。高校時代の担任であった彼女の美貌は、当時に比べていささかも衰えていない。日本人離れした、彫りの深い美しい顔立ちと高身長。

16 その見事なまでのプロポーションは、一流のファッションモデルとして活躍していたとしても不思議ではないほどだった。
「昔話のひとつでもしたいところだけど……あなたも、明日からはこの学園の先生になるんだからね。まずは気を引き締めなさい」
静恵は高級そうな机にもたれ、腕を組んだ姿勢で浅田を見つめてくる。笑顔こそ浮かべてはいるものの、声色は真剣そのものだ。新任教師に活を入れるというだけではなく、なにか重要なことを伝えようという雰囲気があった。
「はい……分かりました」
「最初は初任者研修を受けてもらうことになるわ。あ……それと最初に言っておくけど、校内での携帯やネットの使用は禁止させてもらうから」
整髪する浅田に対して、静恵は思いついたようにそんなことを言った。
「そういえば、もらった資料にも書かれていましたね」
「数年前に在籍していた男性教師が女生徒の着替えやトイレを盗撮して、しかもその映像がネットに流出するという事件が起ったの」
「もちろん普通な学園でも大問題だが、この神宮学園は名門女子校であるため、特にその手の機関を嫌う傾向にある。教職員も多くが聖職に就いていることもあり、以降はより規律を重んじるようになったのだという。」



「書類の中に、守秘義務契約書まであったのはそのせいですか」
「契約書に意味があるかどうかはともかく、そういったもので安心する親御さんもある。まあ学園から出さない」というほうが効果的だけど」
「え、どういことですか？」
「これも資料に書いてあったでしょう？ この学園では在籍している三年間、許可なく学園外へ出ることは禁じられているのよ」
入学した女生徒たちは、卒業までの間、基本的に学園の敷地内で過ごすらしい。
豪華な寮が完備されており、セレブナリの配給物もあるが生活には問題ないというが、外出許可を取らない限り、学園から出られないという点は息苦しさを感じてしまう。
「まるで刑務所ですね」
「なんだか人畜無害なだけで、それは教職員も同

用務員室はそれらの施設から少し離れた場所——敷地の一番隅にあった。小さな戸建てだったが、他の豪華で洋装な設備に比べるとかなり質素な造りをしており、小洒落た部屋では足りない。浅田にとっては好都合だった。小さいながらキッチンもあるし、以前に使用していた用務員が置いていったのだろうか、少し雑多な感じもしたが、どこか懐かしささえ感じられるほどだ。

「あら、浅田先生ですか？」

「室内を見まわしていると、キッチンから修道服に身を包んだシスターが姿を現した。おそく、この女性が静恵先生なのだろう。」

「あ……はい。浅田真です。本日でこの学園の教師になりました。」

浅田が驚いて返事をすると、彼女はクソッと突っ立った。

「あ、ごめんなさい。私はこの学園でシスター長をやっております。静恵、エリと申します。はい、とりあえずは。」

「もう少しで食事の準備ができますから、待っててくださいね。」

「あの、本当にごそくになっていいんですか？」

「自分の部屋となる場所に女性が——しかもシスターがいるということが不思議に思え、」

なんとなく落ち着かない気分になる。

「ええ、私の仕事はこの学園の管理ですから、生徒たちに出す寮の夕食も、私の指示でシスターたちが調理して配っているんです。」

「そなんですか。でも、静恵先生も……」

「エリで結構ですよ。」

「あ、はい……エリ先生も教師なんですよ？」

「ええ、臨時で教壇に立つこともありますが、いまは教職員をまとめる仕事をしています。明確な役職はありませんが教頭のようなものでしょうか？」

「なるほど。」

学園長である静恵を補佐する立場にあるということだ。



「個人的にも、二条先生とは学生時代からの友人でして……」

「ああ、そなんですか。」

「それで先ほどはつい名前を口にしてしまった——というごなのだろう。」

「僕もそうですよ。二条先生は僕が高校時代の担任の先生だったんです。ついでに言くと、教師を目指したのもあの人の影響なんです。」

「初対面の相手に喋りすぎのような気もしますが、互いに昔から静恵の知り合いであることに加え、エリの穏やかな雰囲気につられて多弁になってしまいました。」

「まあ……私も学校の先生に影響されて教職を目指したんです。」

「じゃあ、僕と一緒に……」

「ええ、奇遇ですね。似た者同士と言いますか？」

彼女はそう言って微笑みながら、室内にあるテーブルにランチョンマットを広げた。すでに料理はできあがっていたらしく、促されて椅子に座ると同時に、エリがキッチンから小鍋を運んできた。

「湯気が立ち上る美味しそうなシチューだった。」

「ありあわせのものでですけど……そんな目をギラつかせなくても晩御飯は逃げませんよ。」

「エリは子供をあやす母親のような笑みを浮かべると、小鍋からできたのシチューを皿」

「うお！」

に装ってくれた。誰かに作ってもらった料理は久しぶりだ。

「新任祝いです。しっかり食べて、明日からの勤務に臨んでください。」

「は、はい……ありがとうございます！いただきます！」

空腹には勝てず、浅田は感謝の言葉を口にして勢いよく食事を始めた。

その様子をエリが嬉しそうに眺めている。食べる喜びに頬が緩んでいるのかと思うと、少し恥ずかしい気もしたが、彼女の作ったシチューは本当に美味しかった。

「えつ……ところで、明日から僕はなにをすればいいんですか？」

「食事の仕上げながら、認識化するように聞いてみる。」

「指導計画書を二条先生に提出してもらいます。それと……いま、一年A組の担任が不在です。で、当面はそのクラスを見ていただくことになると思います。」

「新任の僕がですか？」

「担任の代行は私がしていますから、浅田先生は生徒の監視役と言いますか、副担任のよ」

うな役割を果たしていただけます。」

「エリはそう言って、持参していた紙を差し出した。」

「ずらつと名前が同姓されているところからして、そのA組の名簿のようだ。しっかりと名前を暗記しておけというごなのだろう。」

「クラス委員長である西園寺さんには、すでに浅田先生のごことを説明してありますが……」

ホームルームの前に紹介しておいたほうがいいですか？」

「できれば、お願いします。」

「敬請の経路があるとはいえ、教師として大勢の生徒の前に立つのは初めてだ。」

「事前に見知った生徒がひとりでもいると心強い。それと……先生は確か、国語を担当さんですかね？」

「学内で使用している教科書や資料なども、そのときまでにお渡しできるよう準備しておきますので。」

「なにからなにまで、ありがとうございます。」

「浅田は礼を言うと、手渡されたクラス名簿に視線を落とす。」

「全員の顔と名前を完全に覚えるには少し時間が必要だが、明日までにはできるだけ頭に叩き込んでおこうと考える。」

⑥

翌朝。

浅田が完全に準備を整えて待っている。始業十分ほど前にエリが用務員室を訪れた。

「遅くなって申しわけありません。」

「いえいえ、無理を言ったのはこちらですから。」

「さっそく紹介を済ませてしましましょう。クラス委員長の西園寺さんです。」

「初めまして、西園寺書記です。」

エリに紹介された女生徒は、浅田と顔を合わせるより先に頭を下げた。

「神宮学園のシッパな制服に身を包み、フレームレスの眼鏡をかけた——いかにも機学生という外見をした少女だ。」

「物腰もまろく、これなら性格的にも衝突することはないだろうと安堵する。」

「浅田です。よろしく。」

「はい、よろしくお願します。」

「彼女は緊張味の浅田に柔和な笑顔を向け、しっかりとした挨拶を返してきた。」

「はい、行きましょうか。」

「はい。」

先導するエリに従い、本校舎に移動して教室までの廊下を歩く。

まだ教師として正式に紹介されたわけではないのに、途中ですれ違う生徒たちは、浅田にも丁寧な挨拶をしてくる。

お嬢様学校だけに、しっかりとした教育が施されているのだろう。

それでも男性の存在がめずらしいのか、あちこちから遠慮がちな視線を感じた。

「こりや、思ったよりも大変かも。」

「数年間の事件以来、神宮学園に男性教師が着任したのは初めてだという。」

「注目されてしまうのは仕方ないが、相手は年頃の少女たちばかりなので、下手にはだされてしまわないよう気をつけなければならぬ。」

「特に今朝は、起きたときから妙に精力が満ちている感じがするのだ。」

「女生徒たちを決して性的な目で見ないように——と自分に言い聞かせながら、なるべく視線を合わさないようにして廊下を歩き続けた。」

「着きましたよ、ここがA組の教室です。」

エリが足を止めると同時に予鈴が鳴り響いた。

「すると、それまで廊下にはいた女生徒たちが、静かに各々の教室へと入っていく。廊下を走ると、それまで廊下にはいた女生徒たちが、静かに各々の教室へと入っていく。廊下を走ると、それまで廊下にはいた女生徒たちが、静かに各々の教室へと入っていく。」

「いまからホームルームの時間になりますが……浅田先生のごは生徒たちが集まってくるので、少しここで待っていてください。」

「分かりました。よろしくお願します。」

教室に入っていくエリを見送った浅田は、ふと思いついたように西園寺を振り返った。

「そういえば、前の担任の先生はどうしたの？」

「あ、はい……担任の先生は、一週間前にいきなり辞められたんです。エリ先生からはお家の都合でと聞いているんですけど。」

「ふうん。」

「随分と急な話だと不思議に思いながらも頷いていたとき、教室に入ろうとしていた女生徒のひとりが、浅田の顔を見て驚いたように足を止めた。」

「お兄ちゃん？」

「……え？」

「思いがけない呼びかけに驚いていると、彼女は戸惑う浅田に近寄り、その整った顔を吐息がかかるほどの距離まで寄ってきた。」

「やっばりお兄ちゃんだ！　なんでこんなところ！！」

「あ、あの……君は？」

「クラスメートの伊集院さんです。」

「質問に答えたのは、目の前の女生徒ではなく西園寺だった。」

「彼女に伊集院と呼ばれた少女は、大きな瞳を輝かせ、懐かしそうな顔をしながらシッと浅田を見つめている。」

「お兄ちゃんだよね？　絶対そう！　私のこと忘れちゃった？」

「伊集院さん、浅田先生とお知り合いなんですか？」